

バングラデシュ南部避難民救援事業 第5班 (医師)

光森健二 泌尿器科部長

(派遣期間：2018年2月16日～3月22日)

昨年8月にミャンマーからの大規模な避難民が発生して半年以上が経過しました。が、丘陵地帯に広がる避難民キャンプは今も拡大が続いており、劣悪な環境での生活を強いられる避難民の健康状態には様々な問題が生じています。まず寒暖の差が激しく、風邪の患者が毎日クリニックに押し寄せます。一時間問題となっていたジフテリアの発生は以前より減少したものの、水痘、急性肝炎、麻疹などの伝染病が散発的ながら続いています。今後雨季になるにつれてコレラの集団発生やサイクロンによる被害も懸念されるため、それらへの対応策の検討も始まっています。

私自身は今年2月に国際赤十字連盟の指揮の下日本赤十字社の緊急派遣チーム(ERU) 第5班の一員としてバングラデシュにてミャンマーからの避難民の医療支援活動に派遣されました。現地で受診される避難民の多くは感冒か頭痛、全身の痛み、軽度の下痢ですが、なかには重度の下痢による脱水、小児の肺炎などで緊急の入院対応が必要な患者さんもありましたし、骨折や銃創の感染などで外科治療が必要な方もあり、そういった場合には日赤の施設では対応不能のため、治療可能な病院を探して転送させなければなりません。避難民の方はキャンプの外へは出ることができないので、キャンプ内に数カ所にある仮設病院(field hospital)に電話をして対応をお願いするのですが、どこも手一杯でなかなか行き先が見つからず転院先を探すのに一苦労でした。

それだけでなく、日本で泌尿器科専門医として勤務している私にとっては、慣れない伝染病や小児の診察で四苦八苦することもあり、待合に溢れる患者を見ると正直気が重いこともありました(多い日は医師2名で188人を診た日も)。ですが、通訳してくれる避難民ボランティアが「このクリニックの評判がいいので遠くから来た患者さんが言っていた。そんな病院で手伝いができて嬉しい」と目を輝かせて言ってくれることもあり、できる限りのことをがんばろう、と思いを新たにしました。

日赤の仮設診療所はいずれバングラデシュ赤新月社に全面的に引き継ぐ予定でしたので、当初から現地人医師や看護師と避難民ボランティアを雇ってクリニックを運営していました。最初は手術室も備えた仮設診療所と4カ所の訪問診療所を現在運営していましたが、周囲の状況などを調査して手術室の閉鎖や訪問診療所を2カ所に縮小などの規模縮小。運営は現地赤十字社中心に切り替え、内容も診療から衛生教育へ重点を移行していく段取りをしたところで我々第5班の任期は終了しました。

着いた当初はセキュリティーの問題などで避難民キャンプから車で1時間以上かかる街から通勤していましたが、3週目からは避難民キャンプのすぐそばにある赤十字連盟の Field Hospital に隣接した要員用キャンプ暮らしとなり、仮設診療所の診療時間の延長が可能になりました。



そして、任期が残り二週間となった時点で外科医師不足により私の勤務先は、赤十字連盟の Fileld Hospital になりました。病院はテントの集まりでスタッフは多国籍でしたが、外来対応、病棟回診と手術を行うので日本での普段の生活と仕事内容はほぼ同じ。ところが

麻酔科医師が一時的に不在ということで、他の援助団体の麻酔科医師が夕方から麻酔をかけに来てくれるのに合わせ、日中は腰椎麻酔や局所麻酔の手術、夕方から全身麻酔の必要な小児の手術や開腹手術、とかなりハードな時期もありました。



この病院は急性疾患しか受け入れないという方針のため、刺傷・切傷・骨折や熱傷などの外傷と急性腹症の患者さんが多かったです。なかには銃傷を受けた後、受診までに時間が経ってしまい、既に感染が広がり下肢切断が必要な方もおられ、避難民の方々の状況の厳しさを実感しました。

このように今回の派遣でも様々な患者さんの診療に携わり、これにより伝染病の知識や植皮、帝王切開といった緊急派遣される外科医に必要な経験を積むことができました。

このような活動ができたのも赤十字の活動を応援してくださる支援者の方々と、日本で不在の間の外来の代診、病棟や当

直業務を肩代わりしてくださっているスタッフのおかげです。改めて心から感謝し、この経験を今後
に活かしていきたいと思います。

